

四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol. 42

「水 3滴 (話)」

高知県 佐川町長

えなみや 榎並谷
てつお 哲夫



NHK大河ドラマ「功名が辻」でおなじみの土佐24万石山内一豊の筆頭家老佐川1万石、初代当主深尾泉守重良の開いた「文教のまち」佐川町（高知県）の水のこぼれ話3題（水3滴）

その1：佐川1万石国家老深尾氏が菩提寺として開いた龍淵山青源寺の第3世の大牛和尚の命をかけた雨乞いの話

寛文8年（1668年）5月の小雨を最後に、その後60日余り全く雨をみない天気が続いた。領内の人々は、この状況下、水争いにも疲れ果て、大自然の脅威に成すすべもなく、思案にくれていた。思い余った住民は、協議の結果、こうなっては、もう日頃から敬愛する大牛和尚にすがるとしかないと青源寺に駆け込み、事情を訴えた。沈痛な表情の住民の姿に、しばらく沈思した大牛和尚は、何かを決意したように「よしっ」と快諾して住民を帰した。早速、大牛和尚は春日川河原に青紫、草木を山と積んだ急造の祈禱小屋に入ると「2夜3日断食の祈願、満願の刻がきても雨を見ぬときは、祈禱小屋に火をかけてわが身もろともに焼き払え」と住民に命じ、驚きためらう住民を叱って、雨乞いの祈禱に入った。満願の3日目の午後に奇跡は起こり、たちまち空がくもり、大粒の雨が落ち、衰弱し息も絶えだえの和尚は、住民に支えられ、静かに帰山した。その足もとには、命を支える水が春日川を流れていたと言いつた。その偉大なる大牛和尚は今でも町民の敬愛が深く、墓は佐川町上郷の山中にある。

その2：西谷の清水 大正以来百年続く近隣では名の通った老舗のうなぎ屋「大正軒」三代目の店主、和田邦夫さんの話

大正軒のうなぎの味の原点は、西谷の清水にあ

る。この四国名水にも選ばれた清水でしめたうなぎこそ大正軒の味そのものである。この西谷の清水というのは、世界的植物学者牧野富太郎博士の生誕地の100m位の所にあり、この苔むした水飲み場の傍らには芭蕉が詠んだ「むすぶより早齒にひびく清水哉」の句碑が建っている。また、この付近には「セルボーンの博物誌」の翻訳で有名な英文学者西谷退三や、土井晚翠婦人・八枝、「緑の地平線」を歌い天下を風びした流行歌手楠木繁夫の誕生の地でもある。このように古くから佐川の生んだ偉人たちを育ててきた水であり、今でもマニアには愛飲されている。

その3：柳瀬川の氾濫

前述してきたように「雨乞い・清水」と水は人々の生活を支える命の源であり、大自然からの贈りものである。この恵みの水も時には人々の生命や財産をも脅かす凶器となり、犠牲者はあとをたない現実がある。柳瀬川は佐川町尾川から黒岩を経て隣町の越知町で仁淀川と合流している。その合流点付近のいくつかの集落は長年、浸水の被害にあっており地元住民からは何とかならないものかと、諦めにもた悲鳴が聞こえてきている。昨年来やっと地元も立ち上がり、越知町と共同歩調を取り、仁淀川中流域を水害から守る会を結成し、解決に向け立ち上がったばかりである。息の長い運動にはなると思われるが、関係機関のご支援を切にお願いしたいところである。“水を治めるものは国を治める”との格言のとおり水との闘いは古今東西同じである。

環境を守り水を守ることは、必ず人類の幸せと繁栄につながることを確信するものである。



大牛和尚墓



西谷の清水